

行田市船原内郷通遺跡

出土縄文後期の土器について

谷 井 彪

I はじめに

行田市を中心とした埼玉北東部の縄文時代の遺跡は、台地と低地の区分が表面からみただけでははっきりしないためか、従来ほとんど調査がされておらず、遺跡の分布状況はあまりはっきりしなかった。しかし、近年、全県的に各市町村によって詳しい分布調査が実施されるこの地域でも新たな遺跡も多数発見されるようになった。行田市市内でも詳細な分布調査が実施されており、大規模な縄文時代の遺跡は知られていないが、数は増加している。

埼玉古墳群を乗せる埼玉の地は、行田市内でもローム台地であることが最もはっきりしたところであり、いくつか縄文時代の遺跡が知られる。今回紹介する船原内郷通遺跡も古くからの地元の人々によって遺物が採集されたところで、多数の土器・石器が採集されている。

これらをまとめて記載した報告に、『史蹟埼玉』（註1）がある。本書は主に埼玉古墳群を中心に著されたものであるが、縄文時代の遺物についても、石器を中心に出土地名が列挙されている。これらのなかに今回紹介する土器の記述はないが、後期の注口土器のスケッチが示されている。その後、行田市史（註2）でも『史蹟埼玉』の記述を受け、さきたま考古館に収蔵された遺物も加え、写真を交えて紹介された。今回本稿で紹介する土器も2点が写真図版で示されていた。

最近、埼玉古墳群と同一台地上の遺跡である川里村赤城遺跡（註3）が工業団地造成に伴い調査された。縄文時代後期後半から晩期が中心の遺跡であるが、後期前半の称名寺式と堀之内式の遺構・遺物も発見されている。

さきたま資料館では、埼玉の地に点在する8基の前方後円墳と1基の円墳からなる埼玉古墳群を中心に整備と展示等を行っている。また、古墳群やその周辺から出土した遺物についても収集に努め、多くの方々からの寄贈も受けた。今回紹介する3点の土器は、埼玉古墳群の西方の細長く入り込んだ谷に面して広がる渡柳地区の船原内郷通遺跡から出土したものである。故渡辺直熊氏が収集した資料で、さきたま考古館に展示されていた。

昭和44年に当館が開館する際、同氏より寄託を受け、数少ない縄文時代の資料として展示していたものである。その後、昭和48年に寄贈された。

3点の正確な出土地は明かでないが、資料カードには渡柳地区出土と記されている。時期はいずれも堀之内I式中頃である。最近調査された鴻巣市中三谷遺跡、川里村赤城遺跡の土器は、称名寺式から堀之内I式に主体があることから、これらの諸遺跡の出土土器と合わせて地域の特徴を検討しようとするものである。

また、各土器に表現されている文様帯の構成、文様モチーフ、文様要素を前段階の土器や東北南

部の土器群と比較してみたい。

II 遺跡の環境

埼玉古墳群や船原内郷通遺跡を乗せる台地は、大宮台地の東側の北西から南東に伸びた台地群のうち、大宮台地に最も近い台地である埼玉地区の東側にも同様な方向に伸びた台地が並ぶが、いずれも幅が狭い。この地域は関東造盆地運動や利根川等の乱流による沖積地が発達し、現在の地表面の平坦化が進んで、台地と沖積地の区別ははっきりしない。台地も利根川などの開析作用で、所々切れている。

本遺跡を乗せる台地は、大宮台地の東側では最も大きな台地である。埼玉古墳群からやや南に下がった位置が最も幅広く、3,000m強を計る。埼玉周辺の台地は、元荒川の沖積地により切り離されているが、台地の並び方からすれば、大宮台地に含まれ、その北西端の台地ということになろう。比較的幅広くなった埼玉古墳群の周辺からは細長い支台が何本か派生している。各支台はいずれもそれほど枝分かれしない。枝分かれの方向は多くが北西から南東である。

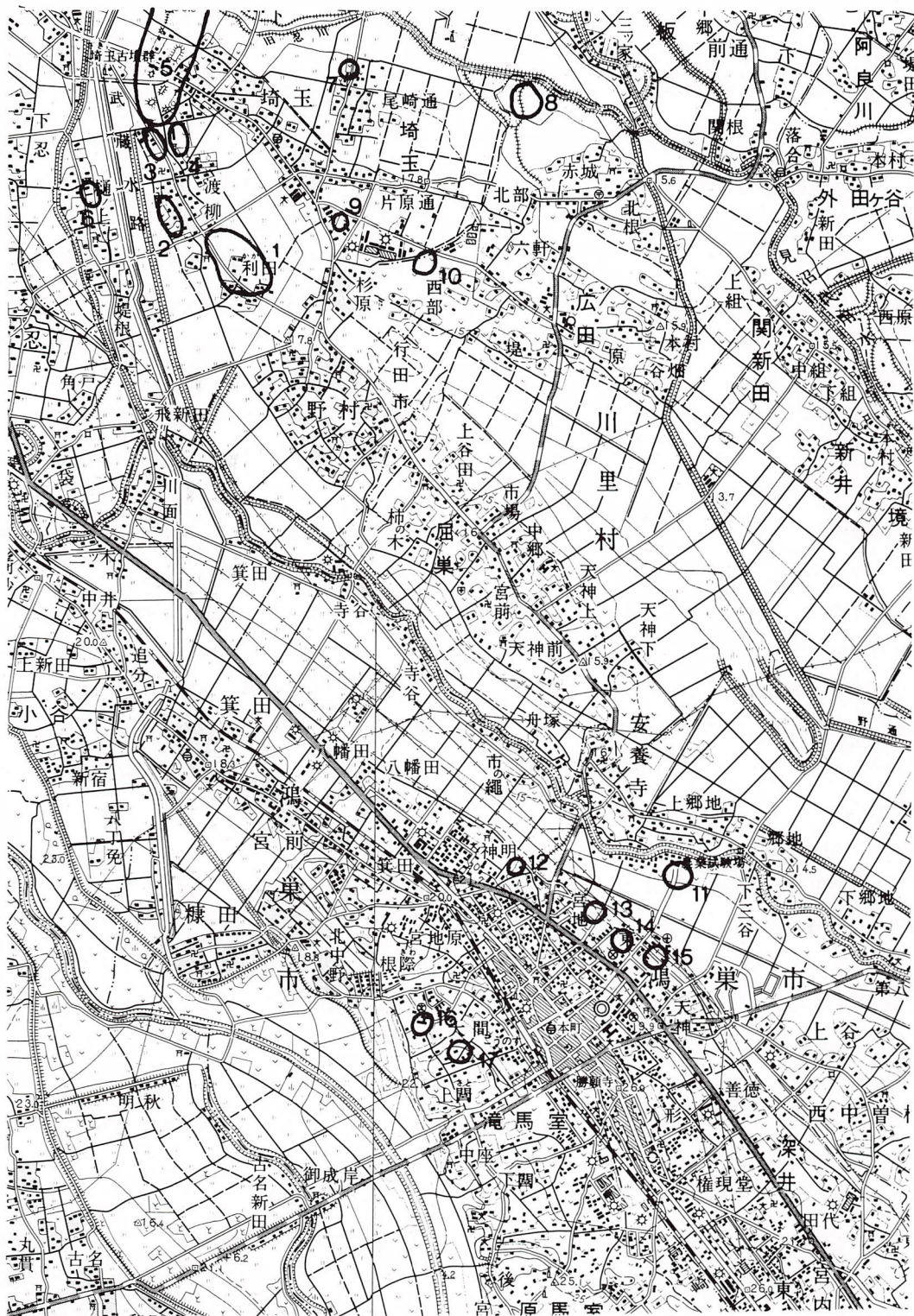
遺跡は、埼玉古墳群から1.2km南を中心に広がり、西側は細長い沖積地を挟んで、堤根の集落を乗せる台地が望め、東はこの谷から分かれた開折谷が入り込み、舌状を呈している。

台地は南に下がってもしばらくは同じような幅が続き、川里村屈巢の南に至ると、急速にすぼまる。近年になって発見された赤城遺跡は、埼玉古墳群と同じ台地上の南東に下がった旧忍川の谷に面した台地の縁で、行田市小針地区の南と川里村赤城地区の間に大きく湾入した谷の北斜面に形成されている。現状は周囲よりわずかに高くなっているが、現在は水田が広がっており、台地と沖積地との区別はほとんどできない。この遺跡は昭和56年、土地改良工事に先立つ試掘調査、発掘調査が、昭和60年には、工業団地造成による大規模な発掘調査が実施された。

調査の結果、台地の縁辺部が検出された。台地の縁は急速に落ち込み、現地表から3.5mほど下がっている。当時の台地下端にも縄文後期・晩期の遺構が検出されている。台地上には沖積地を囲むように遺構が広がっていた。縄文後期の時点の埼玉古墳群周辺や船原内郷通遺跡の場合も赤城遺跡周辺と同様、当時の地表面は現在よりかなり下がっていたと考えられる。

元荒川を挟んだ対岸で発掘調査された鴻巣市中三谷遺跡も、現在の地表面は水田である。現地表から約1.2~1.5m下から古墳時代の遺構面が確認された。縄文時代の遺構面は谷地形に近い場所ではさらに2mほど下がったところで検出されており、縄文時代後・晩期以降、堆積作用の激しいことがわかる。

この地域周辺で発掘調査が実施された縄文時代後晩期の周辺遺跡として、菖蒲町では住居跡の検出された地獄田遺跡(註5)がある。詳細は報告書が未刊で不明である。さらに南の台地である岩槻支台の遺跡は縄文後晩期の遺跡が多い。発掘調査された代表的な後期の遺跡としては、蓮田市で久台遺跡(註6)、ささら遺跡(註7)等、岩槻市で黒谷田端前遺跡(註8)、裏慈恩寺遺跡(註9)等が知られる。さらに東部に位置する低台地の遺跡としては宮代町原前遺跡(註10)がある。



第1図 船原内通郷遺跡の位置と周辺の遺跡

- 1 船原内郷通遺跡 2 内郷遺跡 3 原遺跡 4 陣場遺跡 5 埼玉古墳群 6 鴻池遺跡 7 下埼玉通遺跡 8 赤城遺跡 9 稲荷通遺跡 10 光安寺遺跡 11 中三谷遺跡 12 宮地三丁目遺跡 13 鴻巣市No60の遺跡 14 鴻巣市No42遺跡 15 生出塚遺跡 16 城山遺跡 17 原遺跡

Ⅲ 船原内郷通遺跡出土の土器

第2図は船原内郷通遺跡地区から出土した土器である。

1は底部が欠けるが、口縁部から胴部下半までほぼ完存している。口径21.3cm、器高は推定26cmとなろう。

口縁部から胴部にかけて直線的に外傾した3つの小さな山形突起が付く、いわゆる朝顔形の器形の土器である。口縁部上端は内曲している。胴部下半から底部にかけて内反りぎみとなる。底部を欠失しているためはっきりしないが、他の例から、胴部から底部にかけてわずかに開く底部になると思われる。

文様帯の単位の区切りとなる山形突起は、中央に穿たれた孔の右側の頂部にある。波頂部からは稜が下りる。稜の左側には器壁を貫く孔と盲孔が並び、右側にも盲孔が置かれる。山形突起間は盲孔をつなぐ沈線が引かれている。

胴部文様帯は盲孔をつなぐ沈線から胴部下半までの縦長の文様帯一帯で、縄文LR施文後、沈線で文様を描いている。文様帯の構成は山形突起から下りる3本の直線の沈線を中心とし、3つに区画される。区画線間は、三角形区画で3つに分割される。文様帯上端で突起間中央の位置は、三角形の頂部に当たり、中心に盲孔の穿たれたボタン状突起が配される。文様帯の区分は上端に関するかぎり6単位である。文様帯下端は開放型であるが、突起間は上端中央にあるボタン状貼付文を頂部とする三角形区画の底辺が下端にくることから閉鎖型的である。区画線間の中心となるモチーフはV字であり、下端区画線の沈線は1単位だけ弱々しく引かれているのみで明瞭でなく、文様帯の全体の印象としては開放型といえよう。

次に文様帯を構成する各文様帯をみよう。

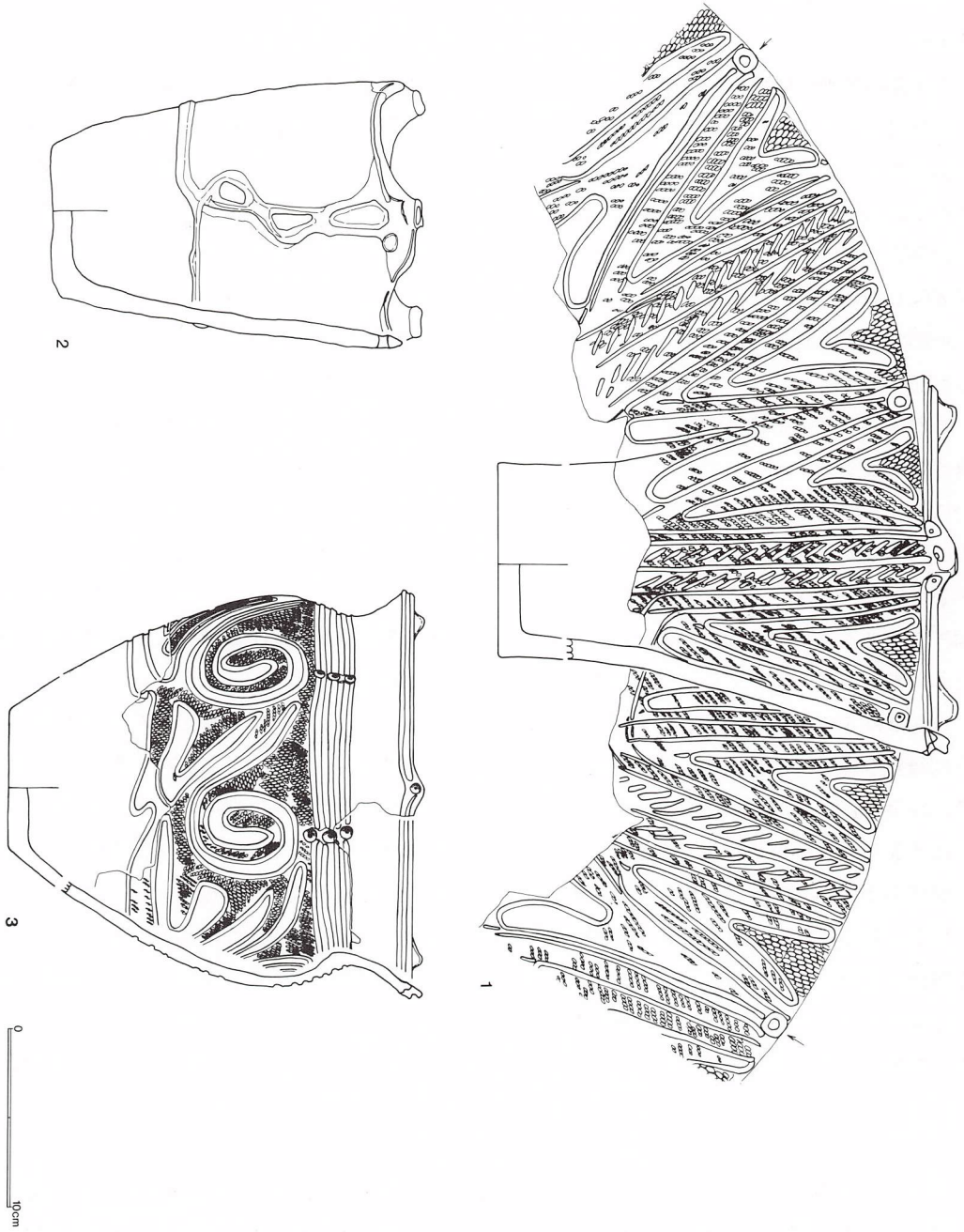
山形突起下の縦長の区画文は、3本の直線の沈線が垂下する。沈線間には斜行した短沈線列が並ぶ。沈線で区画された2列の短沈線列ともみることができる。

この文様帯に接する、底辺が上端に配され三角形区画文は、一本の沈線で描いたV字文がモチーフの中心となる。V字の両側辺は内反り、各文様帯に対しては弧状線となる。このV字文に沿ってV字の沈線が配される。突起下の区画文側は2本である。ボタン状突起は2か所が1本、1か所が2本となる。

V字区画に挟まれた、底辺が下端の区画文となるモチーフは、逆向きの同モチーフのV字であるが、頂部にボタン状突起が置かれ、下端は二股に分かれる。このモチーフに、先に述べたV字文外周の区画線が接することになる。対向した2つの三角形のモチーフは一体的といえよう。

上向きV字文と口縁部区画線に囲まれた三角形の部分の地文縄文は、ほとんど手が加えられておらず、施文当初の姿を残しているが、他の部分ではなで磨り消され、縄文はまばらになっている。特に、上向き、下向きV字文の区画内は、ともに縄文が断片的に残るのみで、上向きのV字文ではこの傾向が強い。効果としては磨消縄文的である。

2は1と同様な同様な器形のタイプで、中央が窪んで環状となる波頂部を3単位配した土器である。底部から口縁部にかけては直線的に伸び、口縁部の内曲もほとんどみられない。口径と底径と



第2図 船原内郷通遺跡出土の堀之内I式土器

の差も少ない。口径15cm、高さ20.9cmである。図示した部分では、口縁部から底部まで遺存していたが、小稿末写真のように、他の波頂部とその周辺は欠けていた。この時期では普遍的な地文縄文を欠き、器面もざらついでいて粗製の土器である。

波頂部以外の口縁部形態は尖った先端に向かって、外側はゆるく、内側は内面に作られた稜から直線的に至る。

波頂部の頂部には盲孔を持つボタン状貼付文が付く。直接左側に波底部に至るが、右側は膨らみを持たせた部分があり、ボタン状貼付文と一体となった波頂部文様を形成している。膨らんだ部分の口縁の下には貫通する孔が穿たれている。口縁部に沿った波頂部間は浅い沈線が引かれるが、図にみられるように途切れた部分がある。この沈線も波頂部の形態に左右されてか、波頂部の右と左では食違っている。波頂部の下で横に浅く引かれた短切線や左の口縁部とをつなぐ斜めの浅い沈線が関係しているかもしれない。

胴部の文様は波頂部から垂下する鎖状のモチーフと下端区画線となる隆帯による幅広の区画文である。波頂部下のモチーフ間にはまったく文様が描かれていない。

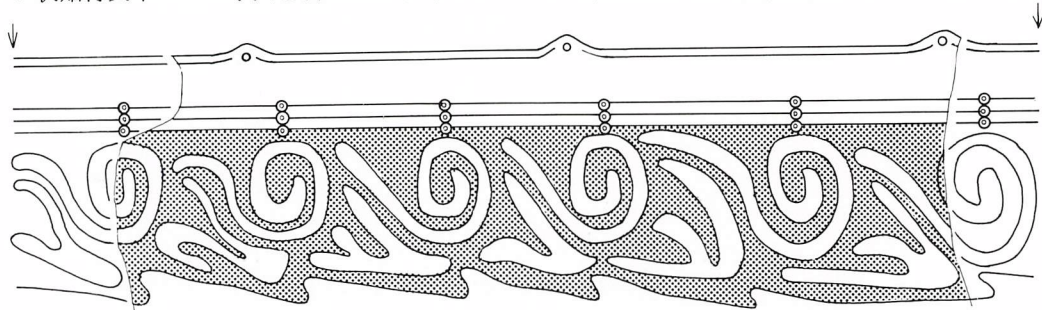
縦の区画線である鎖状のモチーフは、隆帯による半月形のモチーフを左右交互に向け、3つ縦に並べたものである。3つの半月形のうち、波頂下のモチーフはいずれも大きく、最下段のものなかにはやや大形の盲孔を持ったボタン状貼付文風のものもみられた。これらの鎖状の隆帯文のなかには門前式的鎖状隆帯が粗大化したようなモチーフがみられる。

3は頸部で大きくくびれ、口縁部が外反、胴部が上半で大きく膨らみ、下半もゆるく膨らんで底部に至るようである。底部を欠失しているため、器高は不明であるが、器形的には胴部が短く甕というより鉢に近い器形であろう。口径22.9cm、推定器高23.3cmを計る。

口縁部は3単位の小さな山形突起を付した平縁である。口唇部はやや肥厚し、外側から切ったように斜めの縁帯状である。山形突起部の中心には盲孔が穿たれ、盲孔間は沈線が引かれる。口唇部の沈線下は無文帯が置かれ、口縁部文様帯と頸部をつなぐモチーフ等はない。大きくくびれる頸部には4条の沈線が引かれる。沈線の上には6単位の縦に並んだボタン状貼付文が配されている（遺存状態が全体の5/6弱のため、4か所のボタン状貼付文しかみられない）。

ボタン状貼付文の位置は波頂下や波頂部の中間にはなく、全体が右側にずれている。

胴部の文様帯の主文様は、ボタン状貼付文の下に2本の沈線によるのの字文との字末端から伸びた弧状モチーフの磨消縄文が6単位配されたものである。のの字末端から伸びたモチーフは、ボタン状貼付文下ののの字文を斜めにつなぐモチーフの一種であろう。各単位間のモチーフをみると、



第3図 船原内郷通遺跡出土土器(第2図3)の展開模式図

直線的なもの、弧状となるもの、湾曲が強く、一部が上端区画線に平行するようになるものと、一定でない。

文様帯の下端区画線は、一条の沈線であるが、6単位の波頭モチーフを組み込んだ区画線である。いずれも頸部のボタン状貼付文の部分で胴部文様帯の単位は一貫している。

のの字文間をつなぐ弧状モチーフと下端区画線の間にはこの三角形の空白を埋めるように、V字の変形ともいえる磨消縄文による単位文がある。各単位はいずれもモチーフが異なる。文様はのの字下端左側を三角形の頂部とし、細長いモチーフが派生するものである。上辺は斜めの磨消縄文帯に沿うように細長いモチーフとなり、下端区画線に沿っても同様なモチーフとなる部分が大部分であるが、1単位だけU字状に折り返されていた。

沈線で囲まれた磨消縄文のモチーフは縄文の施文された形跡がなく、主モチーフ間の縄文回転方向なども加味して考えれば、充填縄文と考えられる。

IV 縄文後期初頭周辺土器群の編年

以上が船原内郷通遺跡から出土した堀之内I式土器である。従来の堀之内式土器の研究から、I式のなかでも中頃のものと考えられよう。しかし、各氏の堀之内I式の分類をみると、必ずしも一致しているわけではなく、特に、前段階称名寺式終末の理解と堀之内I式との関係からずれが生じているようである。そこで、主な堀之内I式の編年案をみてみよう。

堀之内式の設定者である山内清男氏は「日本先史土器図譜」第VI輯 堀之内式（註11）の写真図版を使った解説の中で、関東でも下総と相模では地域差があること、近似した資料が中部、東北など、関東だけでなく広い地域の分布していること、新旧両型式に区別されることなどの重要な指摘が行われている。現在の堀之内式の研究はこれらの成果をいかに具体化するかの問いであろう。

近年の堀之内式の研究では、特にその細分と個々の土器の系統性が追求されている。

単独の論文で堀之内I式を分析したものに、柳沢清一氏の「称名寺式器論」（註12）がある。論文の中心が称名寺式にあるため、それほどスペースを割いていないが、東関東の土器を従来の堀之内式とし、西関東の土器を東正院式として別型式名を立てた。編年図ではa～d類の4つの段階に分けて代表的な系列の土器を並べ、「概ね、独立懸垂文が次第に区画立体文及び密接集合沈線へ変化する過程」とした。

まとまった形の堀之内式土器論は市立市川考古博物館で実施されたシンポジウム「堀之内式土器」（註13）であろう。その後刊行された報告や論考は、このシンポジウムの成果を受けて行われている。

関東の報告者は、北関東斉藤弘道、南関東東部鈴木徳雄、南関東西北部青木秀雄、南関東西南部石井寛の各氏である。

東関東系の堀之内式については各氏ともほぼ共通する。鈴木氏の分類でみると、最古の段階として文様を短沈線で描いた網取式系に類似した単純な懸垂文で、モチーフ内を無文としたものを挙げ、称名寺式最末期と平行する可能性が高いとした。第2段階には前者のモチーフでモチーフ内を無文とするが、懸垂文が発達したものの、モチーフ内に縄文を残すもの、第3段階には文様を3本単位の

沈線や集合沈線群で描くものが置かれ、単位文としての効果が減り、懸垂文が区画線的となるとしている。最後の第4段階は集合沈線間に沈線群を埋めるもので、半截竹管状工具なども使われ、区画内が埋められることで、文様の横に連結する効果を生み出すものが挙げられている。

齊藤氏の場合、鈴木氏の2段階から4段階をI a式、I b式、I c式に三細分し、a式は「日本先史土器図譜」の神奈川県荒立貝塚や千葉県矢作貝塚の土器を基準とした。b、c式とも新旧の段階差を考慮しているようである。

青木氏の場合も鈴木氏の2段階から4段階までの3細分した。a段階は網取式や称名寺式終末との関係を指摘し、第2段階は出土量が最も多く、横にモチーフを連なる土器に対して後半段階という表現がみられる。

石井氏は、安孫子昭二氏が下北原式(註14)、柳沢氏がの東正院式といった堀之内式と別の型式名で呼ぶことに対し、この地域の土器が東関東とはかなり異なっていることから、この地域の堀之内I式の成立は称名寺式終末の伝統を引継ぐ土器群を中心に東北南部の要素が加わって成立し、独自性が強くなるのは第2段階からであるとして、新型式名の提唱に対し暗に批判している。また、シンポジウムでは平尾遺跡No.9 4号甕棺(註15)や千葉県権現原貝塚の土器(註16)、千葉県姥山台の土器(註17)、さらに鈴木氏のA群甲類1を称名寺式の最終段階とした。

また、第2段階とできる資料は多いが、図示できる多くの土器が第1段階との間に大きな開きのあることから、大多数の資料はその後半とした。第3段階については、後に氏が発表した「堀之内2式土器の研究」のさきがけとなる論及がされており、その構成は一般的な器面全体が多条沈線などで埋め尽くされるといった土器のほかに、第1段階、第2段階といった土器にみられるモチーフも器壁の薄手化、縄文が細くなるなどからこの時期まで残ると主張している。

このほかこのシンポジウムの重要な指摘に、東北南部の網取式の提唱者である馬目順一氏による網取式の細分がある。氏は愛谷遺跡の土器を検討し、網取I式はほぼ称名寺式に対応し、4段階に、II式は堀之内I式に対応、6段階に分けた。従来、網取I式は前後の2段階に分けることが普通であった。馬目氏の新細分案は、今後称名寺式や堀之内式と対比する場合、ひとつの基準となろう。

堀之内式土器の場合、近年住居跡の発見数が増加しているが、器形の推定できる土器がまとまって出土することは少なく、どのような相伴関係にあるかを十分に判断できる材料はないのが実情である。このような状況と、堀之内式に至るまでの多岐性、文様と器形の相互交流が複雑に展開することも加わって、器形、文様要素などをどのように理解するかによって異なった時期区分となっている。シンポジウムで示された土器の組み合わせは、それぞれ扱かう地域が異なるため、まずこの矛盾がそれほど顕在化していないが、関東全体を扱った論考となると、ずれが生ずる。

その後、堀之内I式のみを対象とした論文が少ないが、ごく最近になって阿部芳郎氏による論文(註19)が発表された。氏は堀之内式の成立が東北南部の網取式との関係の深いことから、堀之内式と東北諸型式の分析を通して編年の相互関係をまとめた。

阿部氏は堀之内I式をaからd式の4段階に細分した。氏は堀之内式の成立に網取式が関与していることを意識してか、a式には権現原の土器や平尾遺跡No.9 4号甕棺などを挙げ、称名寺II式に後続する土器とした。シンポジウムでの諸氏との結論とは異なっている。称名寺II式には群馬県

荒砥二之関遺跡（註20）33号住居跡例を挙げている。シンポジウムでの称名寺式終末の土器との関係は微妙であるが、シンポジウムの結論のように、金楠台遺跡（註21）例や後に検討する千葉県鴻ノ巣貝塚（註22）、伊丹山遺跡（註23）例からみてももう一段階を想定する方が適切であろう。

また、阿部氏のa式の土器をみると、幅広の口縁部無文帯を配したものの、C字貼付文、I字貼付文の加わったものなどがほとんどであり、称名寺式系列の土器、あるいは東南北部で称名寺式からの影響で生成された口縁部に盲孔をつなぐ沈線を持つ土器などがみられない。鴻ノ巣貝塚の組み合わせとは著しく違っている。堀之内式の地域性を考慮すると、氏のa、b式の内容はこの頃の特徴の一面のみを表現したものであり、再検討を要しよう。

これらの論考をからも、堀之内式の成立には称名寺式終末と東南北部の網取式が関与し、さらにそれぞれの地域で独自の展開をとげたといえる。堀之内式は関係する要素が多く、変形も多様なことから、正確な編年と各要素の対比を細かく行う必要がある。

称名寺式から堀之内式初頭の住居跡が27軒発見された埼玉県久台遺跡を報告した橋本勉氏は、遺跡を大きく4期に分け、今村編年の称名寺Ia、Ib式の第1期は3段階、Ib、Ic式段階はそれぞれ1段階、称名寺II式の第3期は3段階、次いで、堀之内I式古段階を置いた。報告の最後では後期初頭から堀之内I式最古段階までを都合8段階に分け、編年図で系統ごとに代表例を示して整理した。

堀之内I式成立に直接関係するのは、典型的なII式段階以降であろう。この段階には称名寺B（註24）、鉾切洞穴（註25）の段階があり、荒砥二之堰33号住居跡例もこの段階に当たろう。新段階には平尾遺跡貝の花遺跡（註26）、金楠台遺跡、北塚屋遺跡（註27）第107号土壇などが挙げられている。第4期の堀之内式初頭の組成として、加曾利EIV式系の上下に分かれた文様帯のうち、上段の口縁部下に着くモチーフの消失で生じた波状縁を呈する金楠台遺跡例から頸部区画線を持つ深鉢、称名寺式のモチーフを持つ土器、網取式系の文様構造を受けて成立した土器の3系列が存在することを指摘している。

以上、各氏の堀之内I式を中心とした議論のいくつかをみてきた。まずどの段階から堀之内I式とするか、すなわち称名寺式の終末をどのように考えるかによって意見が異なってくる。第2には共伴土器例の少ないことから、初期の堀之内I式の組み合わせをどのように考えるかであろう。堀之内I式についてはシンポジウムの3細分が広く採用されているが、この場合も具体的な組み合わせとなると、論者によりずれがある。

本稿では、これらを検討するには不勉強で余裕もなく、今後の課題として残るが、今回は船原内郷通遺跡の土器から考えられるいくつかの問題を検討してみたい。

V 埼玉北東部と東関東堀之内式の地域的特徴

船原内郷通遺跡から出土した土器を概観すると、2点は地文に縄文を持ち、複数の沈線で縦の区画線の間を埋めるモチーフが展開したり、渦巻文を中心として横に展開している。1の土器では、文様帯の構成、区画内を埋めるモチーフも後に検討するように、西関東の土器とは異なり、東関東

に中心がある。2の土器も変形しているとはいえ、器形的には典型的な朝顔形であり、モチーフは西関東でほとんどみられない種類といってもよいであろう。時期は先の堀之内編年の主要モチーフが単位文的でない、区画内を沈線群でつなぐ特徴から、とりあえずは中頃のものとすることができよう。

このことから、今回紹介する土器は、一応、東関東の要素が強い土器群といえる。しかし、個体数が3点と少なく、この地域の実態をあらわしているとは必ずしもいえない。

ところで、一般に埼玉や東京といった東西の中間に位置する地域は、両地域の土器が共存する地域に当たる。しかし、地域や時期ごとの具体的な組み合わせの実態は必ずしも明らかでない。この時期の県内の遺跡は、発掘調査の件数等も反映して、大宮台地の南部や南東部である下総台地の調査例が多い。埼玉中部から北部の地域では近年になって、中三谷遺跡や赤城遺跡などの発掘調査が実施されるなど、ようやくその実態が明らかになりつつある。

そこで、この地域の土器の組み合わせやその変遷について、船原内郷通遺跡の土器にこの2遺跡例を加えて検討してみたい。

第4図は、最も接近した位置にある赤城遺跡の称名寺式と堀之内I式を選択して示したものである。遺跡から発見された土器の大半は、後期後半から晩期が中心で、いくつかの住居跡も発掘されているが、土壌や包含層から出土した後期前半の土器もある。

1は称名寺II式の典型的器形で、頸部でくびれ、大きく開いた4単位波状口縁の土器である。胴部に描かれた文様はJ字文、スヘード文の変形、7字文で、横に連る展開となっている。胴部のモチーフはやや崩れているが、坂東山遺跡例とよく類似している。モチーフ内は縄文充填。口縁部を内曲させ、斜めの口唇部帯を作る。波頂部の突起上面や頂部両側に円形刺突文(盲孔)が穿たれ、一部に盲孔をつなぐ沈線が引かれている。

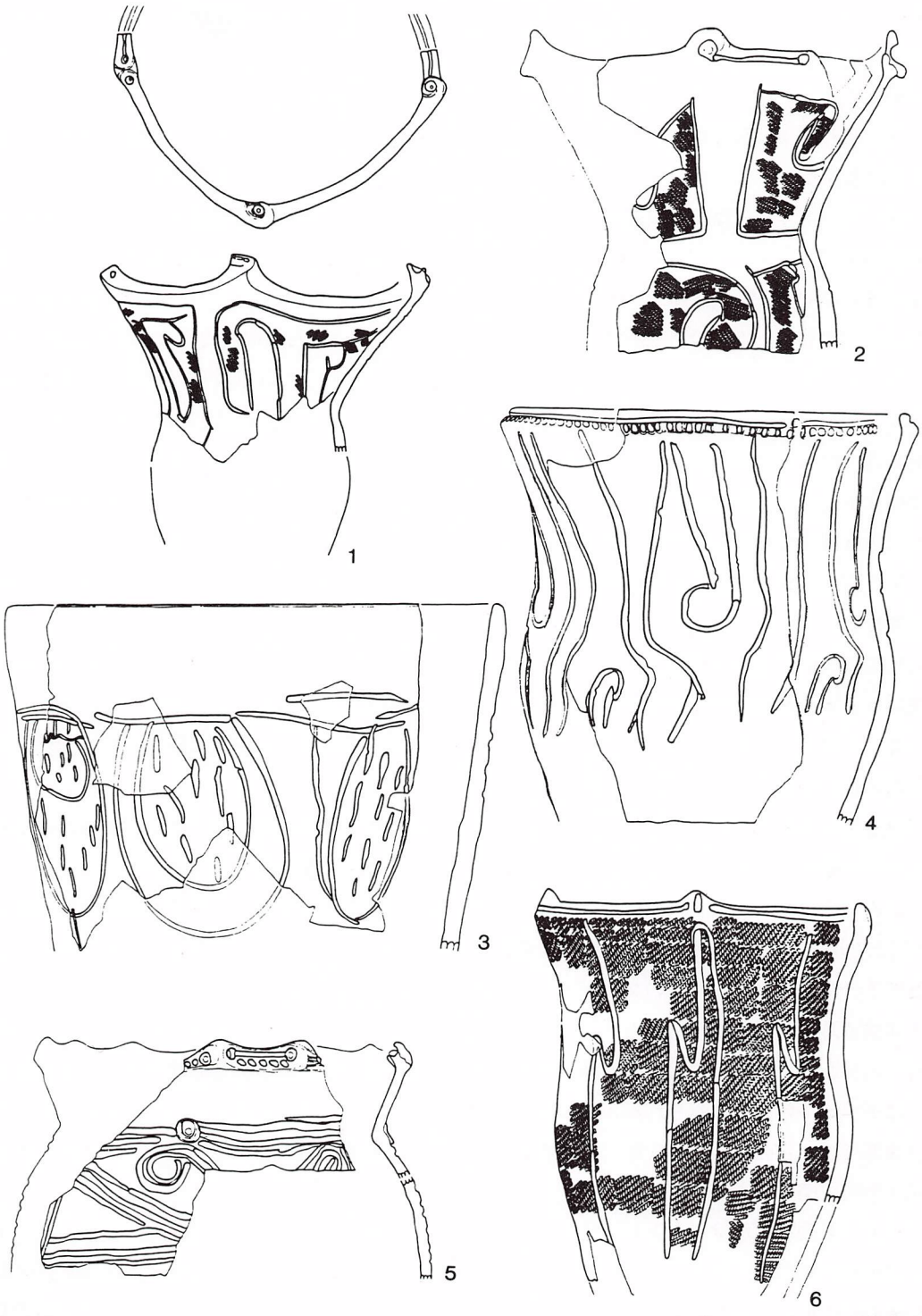
2は1と同タイプだが、くびれが弱い。口縁部には山形突起が付き、突起周辺は円形刺突文、盲孔をつなぐ沈線が引かれる。モチーフは2段J字文で、上下の縄文帯に無文のJ字が配される。文様構成は本来の称名寺式と異なっている。

3は、口縁部の幅広無文帯など、称名寺式に本来存在しない器形と文様帯構成を持つ。これらの系譜には綱取式や称名寺式段階の加曾利EIV式のタイプが予想される。沈線下のモチーフはJ字の先端が上端区画線につながったもの、あるいは対称対弧文の変形で、単位文化しているものがある。

4は称名寺式のモチーフが独立した土器。器形的にも称名寺式の系統上にある。口縁部は内曲し、盲孔をつなぐ沈線、連続刻目文を持つ。堀之内I式の最古段階か。6は同タイプの器形で、地文に縄文を持つ。文様は比較してわかるようにJ字文の変形であるが、単位文化が進んでいる。より東関東的な変形で、時期もそれほど違わないものであろう。

5は頸部で強くくびれ、上半の無文帯、頸部区画線下に文様帯を配するもの。1や4の口縁部と同系列である。胴部文様帯は下端区画線で閉じられる。モチーフ内に単位文の渦巻文とその間を直線的につなぐモチーフがある。盲孔を持つボタン状貼付文のある点も注意されよう。

第5、6図は鴻巣市中三谷遺跡の土器である。縄文後期の土器では称名寺式から堀之内II式まで



第4図 赤城遺跡出土後期前葉の土器

があるが、ここで図示したものは堀之内Ⅰ式までである。1は称名寺式終末の土器で、口縁部に2条の沈線がめぐり、沈線の途中にボタン状貼付文が付くが、口縁部の肥厚はみられない。胴部は独立ぎみの称名寺式のモチーフで、充填の刺突文は区画内に限らず全面に及ぶ。6は堀之内Ⅰ式段階の称名寺式系土器。

2、第6図4は頸部がくびれ、頸部区画線から口縁部までの無文帯を置く。胴部には2段の渦巻文と渦巻文を斜めにつなぐモチーフからなる上下に区画線の置かれた文様帯である。

3、4、第4図2は網取式系のモチーフを持つ。3は刺突文を持つ隆帯がめぐり、区画された口縁部無文帯に隆帯のC字文が付く。4は称名寺式の口縁部形態で、蛇行沈線の懸垂文とU字状剣先文の組み合わせによる文様帯である。2は盲孔をつなぐ沈線の口縁部文様帯で、口縁下無文帯に沈線のC字文が付く。3のように変形しにくいものもあるが、いずれも網取式を消化した土器である。

5～8、第6図1、3は口縁部に盲孔をつなぐ沈線が引かれ、口縁部文様帯が付く。頸部でゆるくくびれ、胴部が張る。5、第6図1は地文無文のもの。7、8、第6図3は地文縄文を持つもの。地文縄文の土器は2本あるいは3本沈線、蕨手文等の懸垂文で区画したり、第6図3のように区画線的な役割を持つ懸垂文と蕨手文の組み合わせたものもある。5はV字あるいはX字で空間をつなぐ。第6図1は独立した懸垂文だが、地文縄文の土器に比べて空間を埋める率が高い。

第5図5は第4図3の区画線懸垂文の土器と同タイプだが、刻目は斜めの沈線、区画内は沈線群で埋める。

6は2のタイプの頸部無文帯が広がり、縄文が充填される。胴部には縄文がなく、集合沈線群で埋める。盲孔をつなぐ沈線が口縁部に引かれる。口縁部は胴部から直線的に移行している。

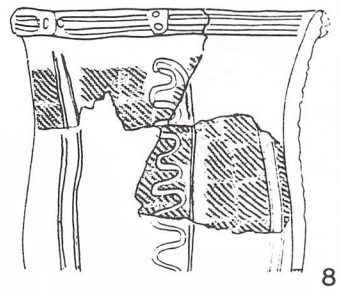
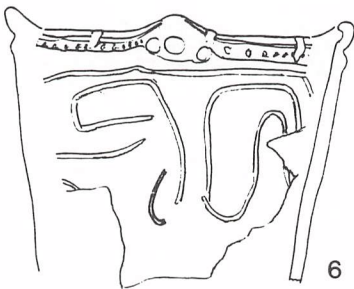
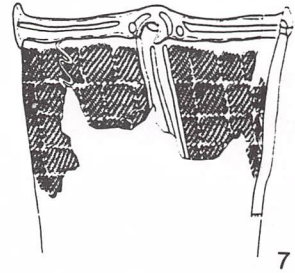
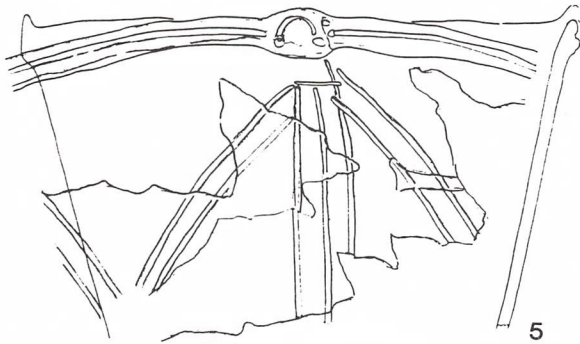
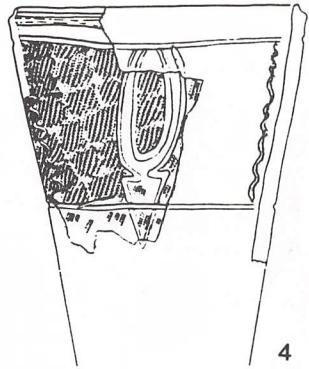
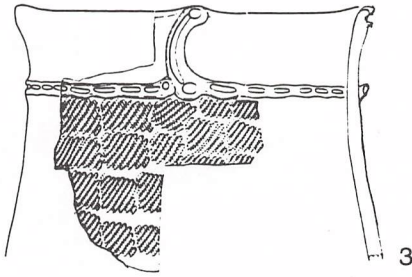
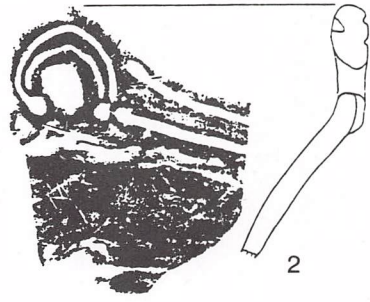
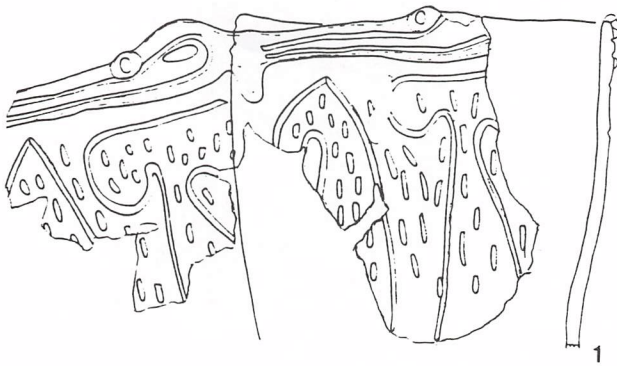
これらのうち、第6図5、6は土器の持つ特徴から堀之内Ⅰ式でも中葉以降であり、ほかの土器とは時期に隔たりがある。

以上が2遺跡から出土した土器の概要である。これらの土器群の時期は、大半が称名寺式終末からⅠ式の前半が主体で、今回紹介した土器の段階までの概略の経過を知ることができる。

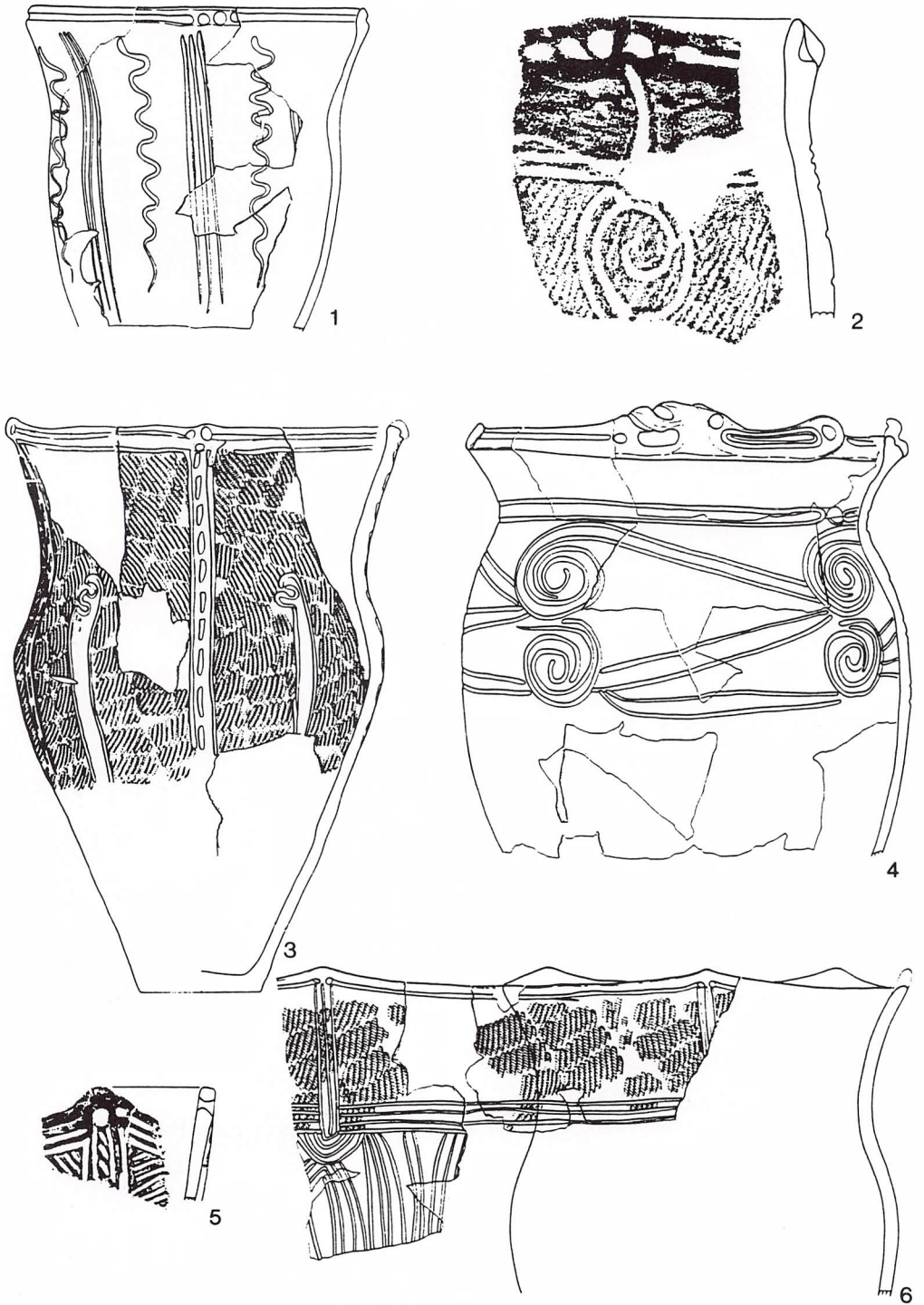
この地域の称名寺式終末段階の組成をみると、量的に称名寺式系統が主体で、網取式系土器が伴出している。さらに、赤城遺跡2の土器のような磨消縄文によるJ字文が反転し、無文のJ字となるモチーフを持つ2段構成の文様帯となる。

赤城遺跡の称名寺式系統をみると、第4図1の土器をへて3の称名寺式の土器、さらに4の堀之内Ⅰ式初頭の土器に至る。この段階で中三谷遺跡の第5図1のような称名寺式モチーフを単位文化したモチーフの土器がみられる。これら称名寺式系土器には、やや肥厚ぎみで、外反りしたような口縁部形態、盲孔をつなぐ沈線、盲孔のあるボタン状貼付文を持つ例がみられる。いずれの要素も堀之内Ⅰ式で盛行する要素である。

一方、量的には小数であるが、第5図3や第6図2に象徴される幅広い口縁部無文帯にC字文などが置かれる土器、あるいは対称対弧文と剣先文を組み合わせた単位文の土器（第5図4）のような網取式に近い土器がある。頸部で強くくびれ、成部無文、胴部に横帯文を置く土器で、渦巻文間を斜めにつなぐ沈線のみられる例（第5図5、第6図4）は、従来の称名寺式、網取式のいずれにもなく、称名寺式終末段階で両者の要素から創成された土器である。



第5図 中三谷遺跡出土後期前葉の土器(1)



第6図 中三谷遺跡出土後期前葉の土器(2)

この地域の堀之内Ⅰ式土器は、西関東的堀之内式と東関東的堀之内式の両者が混在するが、東関東的堀之内式では、盲孔をつなぐ沈線や刻目文等のめぐる肥厚した口縁部文様帯が普通である。

堀之内Ⅰ式中葉の段階でも中三谷遺跡の例をみると、両地域系統の土器が相半ばしており、船原内郷通遺跡例のように典型的な東関東的とされる土器も存在する。集合沈線群の段階には第6図5、6がある。口縁部は丸棒状で、盲孔をつなぐ沈線が引かれる。頸部素文帯を置く土器では胴部の文様が無文地に描かれており、西関東的要素もうかがえる。

この時期の埼玉東部地域の遺跡には、蓮田市久台遺跡、ささら遺跡、岩槻市裏慈恩寺遺跡、宮代町前原遺跡、白岡町皿沼遺跡(註28)などがある。

称名寺式から堀之内Ⅰ式古段階にかけて多数の住居跡が発見された久台遺跡は、破片資料が多く、称名寺式系土器が主体となっていた。ほぼ同時期のささら遺跡でも網取式系土器が含まれているが、同様な傾向であった。

皿沼遺跡では堀之内Ⅰ式中葉段階の住居跡が検出され、まとまった土器が出土している。いずれも地文縄文の土器で、大筋では東関東的土器であった。前原遺跡の組み合わせも包含層から出土したものであるが、大多数は地文に縄文を持った土器であった。

関東の称名寺式終末の様相は、神奈川県称名寺貝塚、千葉県鉾切洞穴といった代表例から知ることができる。東京湾を挟んだ対極に位置する両遺跡の内容は、区画内に刺突文を持つ称名寺式の典型タイプが比較的多くてよく似ている。しかし、鉾切洞穴はモチーフが単位文的となるが、縦長のモチーフになることは少ない。また、具体的な組み合わせははっきりしないが、堀之内式的土器もかなりみられ、様相の違いもある。

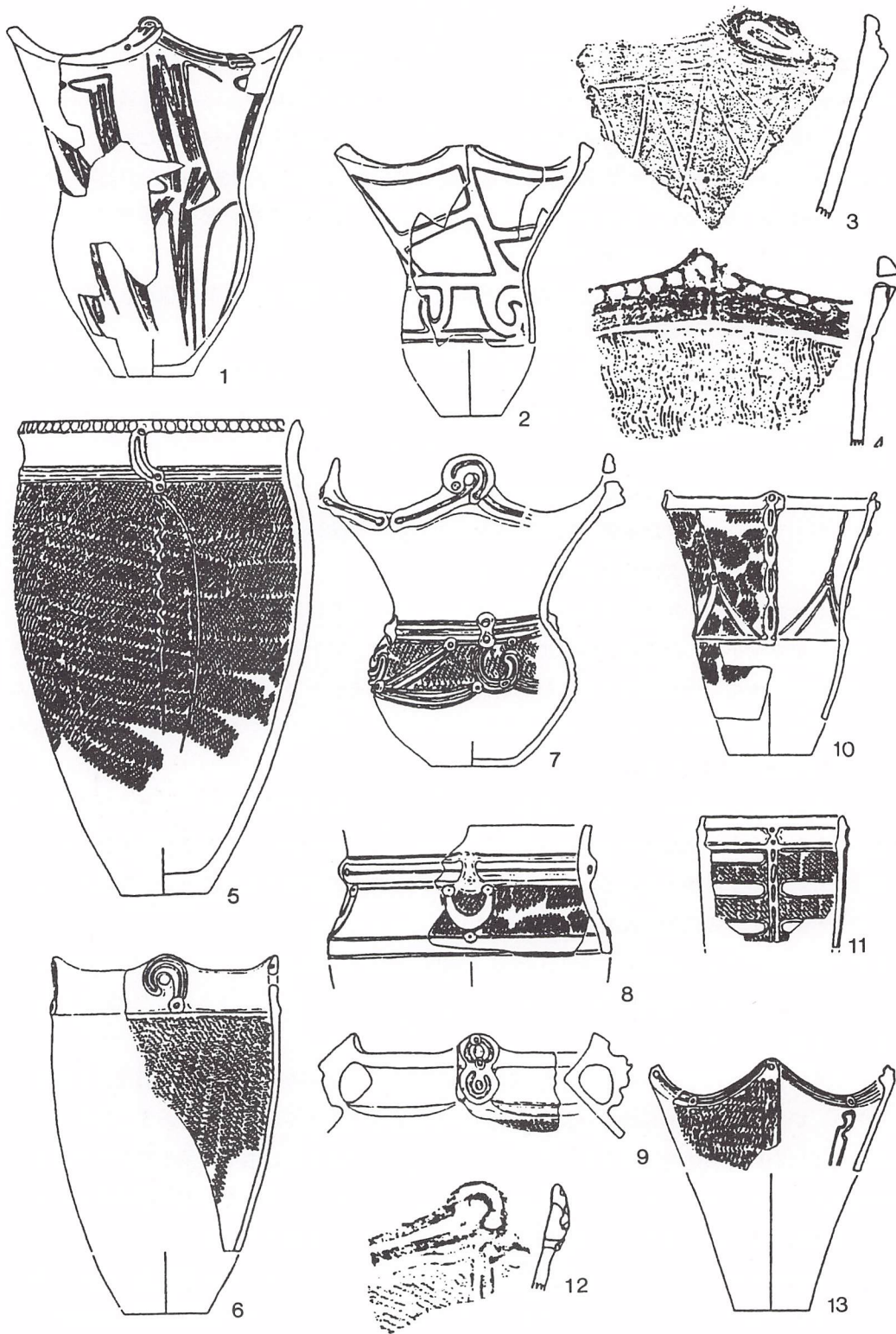
称名寺式系土器の東北南部への進出を概観すると、宮城県二屋敷遺跡(註29)では、区画内を縄文充填した称名寺式Ⅰc式段階のモチーフが胴部文様帯として採用され、福島県網取遺跡(註30)、大畑遺跡(註31)でも多数みられる。福島県の称名寺式に最古式段階のものは今のところみられないようであるが、Ⅰc式段階では確実に進出していることがわかる。

茨城県の県北部にある小場遺跡(註32)や吹上遺跡(註33)でもⅠc式段階からのようである。沼尾原遺跡(註34)、南三島遺跡(註35)、廻り地A遺跡(註36)などの茨城県南端の遺跡になると各段階とも普遍的に存在する。

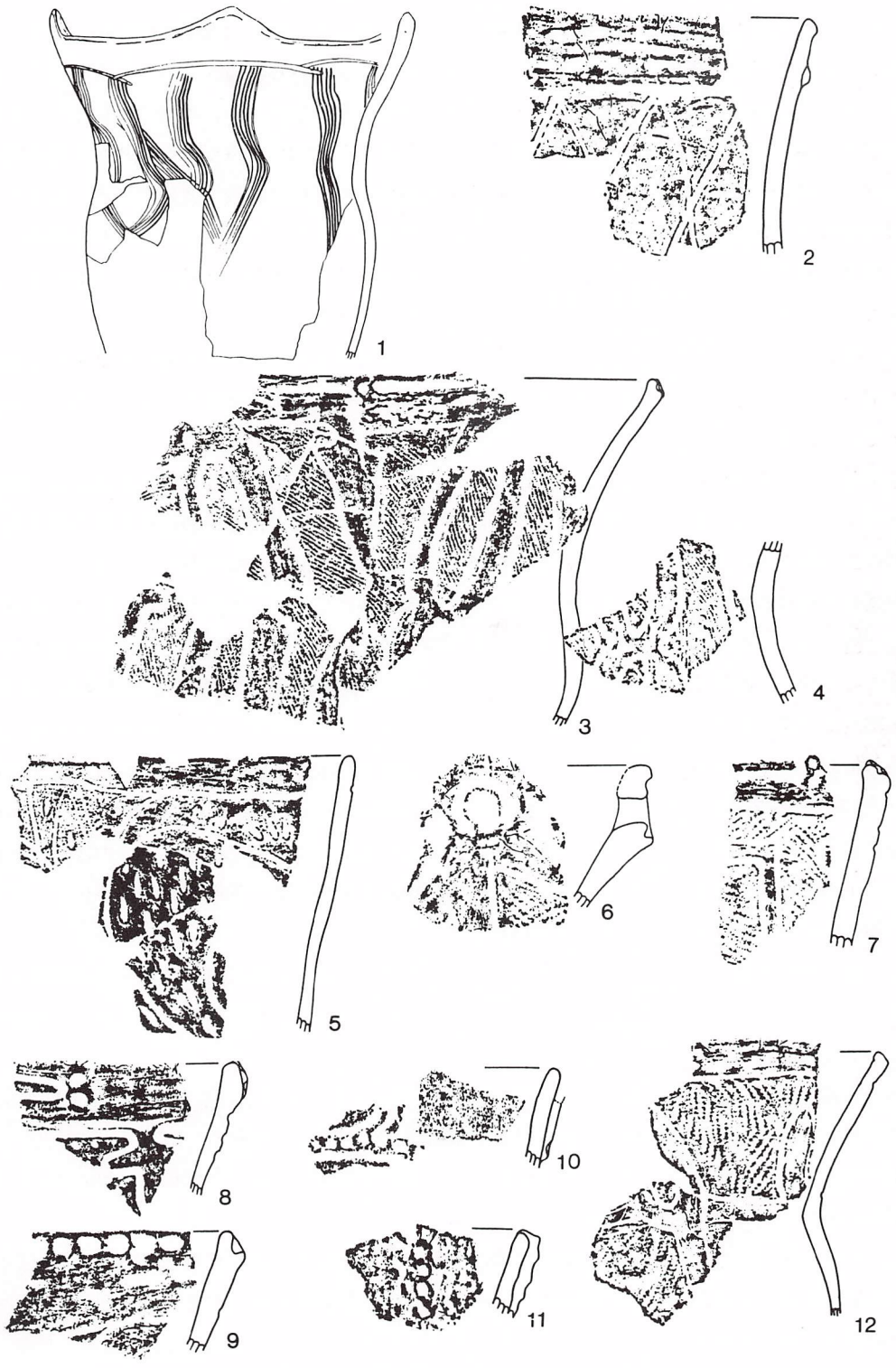
一方、称名寺式終末の土器となると、愛谷遺跡の区画内に刺突文の充填された土器は、Ⅱ式前半段階であり、網取遺跡でもみられない。小場遺跡でも称名寺式系土器は断片的であり、称名寺式から堀之内Ⅰ式にかけての遺跡である廻り地A遺跡、南三島遺跡群でも称名寺式系土器だけで終末の一時期を形成する組み合わせはない。このことはすでに堀之内式のシンポジウムで称名寺式の終末に石井氏が権現原遺跡や姥山遺跡をこの段階に置くことで間接的に指摘している。

そこで、称名寺式終末頃の土器が比較的まとまって出土している千葉県鴻ノ巣貝塚、伊丹山遺跡の土器を通観してみよう。位置は鴻ノ巣貝塚が九十九里浜沿岸から入る谷に面し、伊丹山遺跡は東京湾に面した遺跡である。両遺跡とも遺構から出土したものではないが、この時期に集中し、それほど時間幅のないことから取り上げたものである。

第8図が鴻ノ巣貝塚の土器である。Ⅰc式段階の区画内縄文充填の土器と共に、刺突充填文で、



第7図 酒々井町鴻ノ巣遺跡出土後期前葉の土器



第8図 袖ヶ浦町伊丹山遺跡出土後期前葉の土器

単位文的な土器もある。図示した1は集合条線で区画内を埋める。横のつながりが切れ、モチーフが縦長となる。すでに口縁部には盲孔をつなぐ沈線、8の字文がみられる。2も称名寺式系の土器である。胴部にJ字を主モチーフとした上下に区画線のある横帯文がある。本来は7にみられる頸部無文帯下が強くくびれる土器の胴部文様帯である。5から9に綱取式系土器を集めた。同時期には堀之内I式段階も含んでいる可能性があるが、土器群構成の骨格は綱取I式的である。各所に中心地域の綱取式と称名寺式の関係は異なった称名寺式の要素が加わっていた。取り入れた綱取式の要素を独自に変形させた例といえよう。5の口縁部の刺突、7の口縁部の文様帯、8の無文帯下の盲孔をつなぐ沈線と突帯、9の橋状把手などに反映されていよう。

また、綱取式にはほとんど存在しない口縁部無文帯下に格子文波状条線文が縦に施文される粗製の土器(3、4)も加わる。図示されている量は少ない。報告では小破片まで図示されていることからそれほど量は多くないと思われる。

これに対して、東京湾に面する伊丹山遺跡ではこのタイプの土器がかなりの比重を占める。図示したのは、1、2のみであるが、様々なタイプがあり、2のように古相といわれる突帯で無文帯で区画するものがある。無文帯は他の土器と同様狭く、それほど時間差がないかもしれない。

この遺跡で綱取式系といえる土器は10、11の口縁部無文帯にC字文、刺突列のめぐるI字隆帯文の付く土器ぐらいである。6は盲孔をつなぐ沈線列のめぐる波状口縁の深鉢で、縄文の充填された称名寺式のモチーフの付く可能性がある。7は同様に外削ぎ状の口唇部に沈線と8の字隆帯が付き、胴部は縄文が充填された区画文である。称名寺式モチーフとは若干異なるが、口縁部に盲孔をつなぐ沈線が一周すると思われるものでも、3、4のような縄文充填の土器があることから、変形した称名寺式のモチーフのようである。12も縄文地に無文で縦に並んだ2段J字文を描くものであり、称名寺式前半にみられたモチーフがこの段階まで残ることを示すよい例であろう。このほか、区画線下に描かれた曲線文に刺突文を加えたもの、8の口縁に2条の沈線、8の字貼付文が付き、沈線のみで称名寺式の単位文を描いたものなどがある。

同じ千葉県内に営まれた両遺跡例の土器群は、称名寺式II式前半と堀之内I式古段階の様相を考えれば、いずれもその間にはいるものであり、ほぼ同じ年代の所産と考えられる。しかし、両者の組成はかなり異なっており、この千葉県内だけでも違いのあることがわかる。

根本的な違いは鴻ノ巣貝塚の地域では綱取式系の土器が大量に採用されるが、伊丹山遺跡では、称名寺式系と新たに粗製の条線文、格子目文が綱取式に代わることである。関東中央部に近い千葉県江戸川台第I遺跡(註37)でも称名寺式終末の土器がまとまって出土しており、組成的には伊丹山遺跡に近い。全体的に古相を示すためか、称名寺式タイプの占める割合が高い。

先に、行田市周辺の堀之内I式古段階の地域性を検討したところ、西関東系と東関東系が相半ばし、これに綱取系の土器が加わって構成されていた。このうち東関東系の縄文を地文とした土器でも、口縁部文様帯に西関東系の地文無文の土器のあり方と共通することが多かった。

鈴木氏は、千葉県の堀之内I式最古相の土器について、文様を単沈線で描いた懸垂文が発達し、懸垂文内は無文とするものと縄文の充填されたままのものとがあり、懸垂文が縦位区画線効果を果すようになるとした。取り上げた土器は多くが盲孔をつなぐ沈線、刺突文の加わる口縁部文様帯を

持ち、これに称名寺式以来の肥厚するが、沈線の引かれぬもの、綱取式系の口縁部無文帯と沈線のI字文を持つ土器を加えている。

一方、他氏が堀之内最古式とした土器を阿部氏の編年に対比すれば、I b式に当たろう。阿部氏の2論文で取り上げたI b土器は、いずれも口縁部無文帯を置く土器のみであった。住居跡資料としては伊篠白幡遺跡(註38) 112号住居跡床面の土器を挙げている。

氏はI b式の特徴をI a式の口縁部文様帯の区画線が隆帯から沈線といった変化すると考えて、これらの土器を取り上げたのであろう。

鈴木氏と阿部氏の取り上げた土器を土器を比較すると、全く顔付きが異なっている。両氏の違いは、限られた数の中で、重点の置き方が異なるため生じた結果であろう。しかし、埼玉北東部の土器は、口縁部文様帯を持つ土器は、ほとんど肥厚した口縁部に盲孔をつなぐ沈線が引かれた土器であり、両氏いずれの土器群だけで東関東堀之内I式の最古式の土器を定義することはできない。

ところで、阿部氏が考えている後続のI c式の土器をみると、口縁部無文帯の土器は姿を消し、口縁部に盲孔をつなぐ堀之内I式特有の沈線の引かれた土器が挙げられている。しかし、口縁部形態は多くが肥厚せず、丸棒状口縁であった。氏の取り上げた伊篠白幡遺跡のほかの土器をみても、かなりの割合で丸棒状口縁の土器があり、前段階の口唇部の器形を踏襲していることがわかる。

伊篠白幡遺跡は印旛郡酒々井町にあり、近接して点在する茨城県南三島遺跡群、廻り地A遺跡、沼尾原遺跡などの土器も、伊篠白幡遺跡と同様な傾向がみられるようである。これに対し、東京湾岸の千葉県市木戸作貝塚(註39)、小金沢貝塚(註40)などでは口縁部の肥厚した土器が多い。しかし、地域のよっては丸棒状の口縁が多い地域もあるようである。

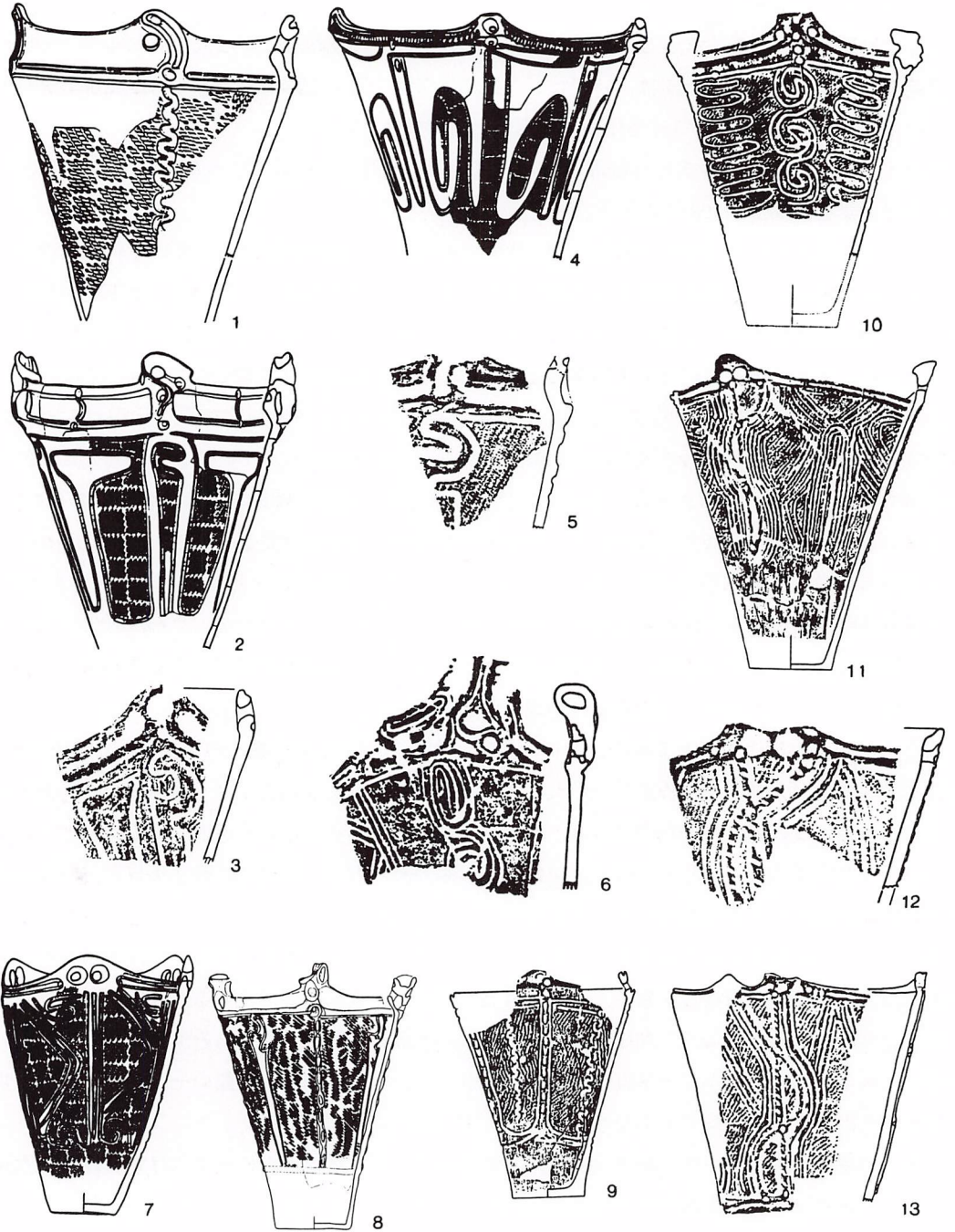
堀之内I式に平行する綱取II式で、その前半といわれる胴部に磨消縄文の施文された土器では、胴部文様の変化の方向は異なるが、いずれも丸棒状口縁である。このような千葉県での口縁部のあり方から、鈴木氏の堀之内I式の土器は、肥厚した口縁部に偏っている可能性もある。

このような千葉県における堀之内I式の口縁部形態のあり方は、前段階の鴻ノ巣貝塚、伊丹山遺跡の口唇部形態から大きく変貌したことになる。

堀之内I式を象徴するこのほかの土器として、頸部無文帯下で強くくびれ、胴部の張るタイプがある。大畑貝塚にみられるように、一時は東北南部まで大量に進出している。宮城県二屋敷遺跡の鉢形土器とされる土器は、一部に頸部無文帯に縦の区画線を置く土器もある。本来東北にはない器形で、称名寺式終末例から大畑貝塚例に至り、さらに、分岐した変化形態の一つと考えられ、東北では堀之内I式平行段階でもかなり比重を占めている。

一方、千葉県の堀之内I式段階ではほとんど姿を消す。シンポジウム資料中には齊藤氏、鈴木氏とも全くみられない。堀之内I式成立段階で大きく変貌したことになる。

ところで、頸部素文帯を持つことで類似した土器に頸部がゆるくくびれ、胴部の張る土器がある。主文様は素文帯下に引かれた区画線下にある。口縁部には盲孔をつなぐ沈線が引かれる。頸部素文帯には縦区画線やV字文、2条の縦区画線などがある。頸部が強くくびれる土器の場合は、頸部無文帯に限られ、関東の場合、縦区画線等が設けられることもない。くびれのゆるい土器は称名寺式終末からの頸部が強くくびれる土器の系譜上にないといえよう。堀之内I式段階になって出現した



第9図 朝顔形の器形系譜関係土器

1、2、4、5、7、12 二屋敷遺跡 3 木戸作遺跡 6 南境貝塚
8 六反田遺跡 9、10、11 大貫落神遺跡 13 長孫遺跡

ことになる。成立の基本となる土器としては、中三谷遺跡の土器第6図2を考えてみたい。2の土器は肥厚する口縁部下の頸部の無文帯に沈線のC字文の退化したモチーフが描かれ、区画線下にはJ字文の変形モチーフが置かれる。網取式系の口縁部無文の土器に堀之内式の口縁が付いて成立した土器と考えられる例である。築地貝塚(41)例も頸部無文帯の区画線はI字文であり、同様な解釈で説明できよう。

VI 船原内郷通遺跡出土土器諸要素の系譜

船原内郷通遺跡の土器は、称名寺式終末からの複雑で激しい変動の結果、Vの項で概観したように埼玉東部地域の土器として成立したものである。

しかし、個々の土器を構成する諸要素はそれぞれ多様な経緯をへてこの段階に至っている。そこで、ここでは第2図1、2の朝顔形といわれる器形の系譜、文様帯では器面を分割する縦区画線および下端区画線、盲孔のあるボタン状貼付文を検討してみよう。

朝顔形といわれる器形は、称名寺式に全くみられず、堀之内式になってはじめて出現した象徴的な器形である。この器種の系譜に触れた論考は聞かないが、堀之内式成立を探る一つの問題であろう。

第2図1は口径に対して器高が高く、典型例に近く、2は口径に比べると底径が大きい。後続する堀之内Ⅱ式土器の主要な土器である幾何学的な磨消縄文の文様が付く朝顔形土器の場合は、口径に対し、器高が低くなり、変化の方向が異なる。粗製の土器の場合の一変形かもしれない。

これらはいずれも中葉段階以降の一般的な器形であるが、堀之内Ⅰ式成立段階の例としては中三谷遺跡の第5図7が一例である。第5図4は網取式的胴部文様帯を持つが、全体の形は7と相似形といえよう。船原内郷通遺跡例と比較すると、縦長ということでは類似するが、口縁部の開きがみられない。中三谷遺跡例に近いものに、浦和市椀谷遺跡(註42)の蕨手状懸垂文の付く例がある。浦和市前窪遺跡(註43)のこの種の例も円筒形に近い器形で、胴部に縦区画線間に区画内をつなぐ横帯文が2段配されている。これと同様な器形や文様帯の土器に、千葉県鴻ノ巣貝塚例の口縁部に網取式的な口縁部文様帯の付く例がある。この土器の口縁部の代りに盲孔をつなぐ沈線の口縁部文様帯を付ければ、前窪遺跡例となる。編年的には鴻ノ巣貝塚例から前窪遺跡例となろう。

鴻ノ巣貝塚には13のような胴部に蕨手状の独立した懸垂文の付く古相な朝顔形の土器がある。11と13は時間的な経過を映しているようだが、それほど大きな時間的隔たりはないように思われる。前窪遺跡例や椀谷遺跡例から船原内郷通遺跡例タイプへと変化するというよりは、両タイプの器形がある時期には共存していたと考えられよう。

地文に縄文を持つ朝顔形の器形の土器は、西関東にも及んでいるが、分布の主体は埼玉の東部地域から東関東地域であることは明かであろう。東北も地文に縄文が付けられる地域であり、共通したモチーフも多い。そこで、中期終末の大木10式をはじめ、後期初頭や前半の土器が大量に出土した宮城県二屋敷遺跡などで底部から直線的に開く土器を集めてみた。(註44、註45)。

盲孔をつなぐ沈線の口縁部文様帯を持つ例としては6を挙げた。縦区画線間に縦のS字文と斜行



第10図 文様帯、文様モチーフ関係土器

- 1 陸平遺跡 2 権現原遺跡 3、6 二屋敷遺跡 4 日向遺跡 5 上の台遺跡
 7 下の内遺跡 8 岩野原遺跡 9 貝屋A遺跡 10 塔ヶ峰遺跡 11 立石遺跡
 12 愛谷遺跡

文が配される。発達した突起が付いているが、すでに関東のこの段階ではみられない。7も胴部やや膨らみがあるが、朝顔形の器形のバリエーションであろう。縦区画線間を斜行沈線で埋めるものである。モチーフは関東で普遍的だけでなく、南境貝塚例にもある。区画間空白部を沈線の波頭文で埋める手法は、関東堀之内Ⅰ式の下端開放のモチーフと異なり、船原内郷通遺跡例に近い。

ところで、独立した単位文的蕨手状懸垂文が付く5の場合、外反した無文の短い口縁部に沈線のC字文がある。綱取式系の口縁部形態である。一見したところでは3の千葉県木戸作貝塚例とよく似ている。木戸作遺跡例は称名寺式的モチーフのためか、蕨手文内の縄文が磨り消されている。5の綱取式口縁部に代わって堀之内式の口縁部が採用されると、3の土器が成立しよう。5のタイプの本格的な土器としては、2がある。蕨手文の両側に側線があり、5よりやや新しいモチーフとされる。しかし、口縁部は綱取式の口縁部形態を持ち、S字状隆帯の貼り付いた橋状把手、C字状沈線が配されている。口縁部の幅が広くなり、口縁部上端に把手と一体化した板状隆帯など、綱取Ⅰ式からⅡ式への新たな発展をとげた口縁部文様帯である。この2例からみると、その原型は1に近い形態と考えられよう。口縁部形態は5と同類型であり、沈線のC字文に代わってはっきりした隆帯のC字文が付いている。C字文の両端に盲孔を持つ沈線が引かれていることや口縁部の外反度が強いこと、胴部に蛇行状懸垂文が付くことなどは綱取式の特徴をあらわしていよう。しかし、仮に口縁部の外反度をゆるめ、C字文の沈線を省略、さらに胴部文帯の懸垂文の代わりに大木10式のモチーフを付けるとすれば、その後半期と近似した土器となろう。

大木10式後半に続いてこの種の器形の発達した後期初頭の土器群に、岩手県を中心に分布する門前式土器があり、器種構成の主要な位置を占めている。東日本の後期初頭で特殊に発達して土器群といえるかもしれない。

関東の朝顔形土器の場合は、綱取式の朝顔形の器形と称名寺式後半段階で東北の影響を受け、関東が独自に作り出した口縁部文様帯と結び付いて成立したものと考えられる。

これに対して、東北では綱取式の口縁部形態が新しい段階まで根強く残り、類似した器形、胴部文様帯を持っていても、堀之内式的口縁部が採用されないため、関東とは別の展開を示す。多くの土器で堀之内式口縁部が採用されるのは、集合沈線で器面を埋める後半段階になってからである。

つぎに、文様帯区画線を検討しよう。第2図1の文様帯区画線は明確な上下区画線を持たず、一応は開放型である。しかし、単独の懸垂文のみの場合と異なり、区画内にはV字状単位文が逆になって文様帯下端に置かれたり、一部の沈線が縦区画線から分かれて底辺で横に引かれた沈線もあって、下端が完全開放型となっていないともいえる。

第9図7は東北の例である。船原内郷通遺跡の1と同様に上下の空白を単位文的モチーフで埋めており、新たな文様帯の傾向が生じてきた結果と思われる。

船原内郷通遺跡1に描かれた縦区画線は、3本沈線間を斜行短切線で埋めたものだが、隆帯に比べ顕在化しない。このモチーフの類似例は2条沈線間を埋めるものを加えれば、かなりの類例が知られる。第9図9は縦の刺突列であるが、変形した一例かもしれない。

第2図2は鎖状縦区画線と下端区画線が引かれている。鎖状縦区画線の例として、第9図11~13までを挙げた。いずれも朝顔形土器の縦区画線で、隆帯には刻目が付く。船原内郷通遺跡例と異な

り、精製の土器である。このモチーフの類似例はきわめて少ないが、関東では茨城県北部の大貫落神遺跡（註46）例がある。要所要所には盲孔を持つボタン状貼付文が置かれる。東北では福島県長孫遺跡例（註47）、さらに北に行くと、宮城県二屋敷遺跡例があり、類例の少ない割に広範囲の地域で分布している。縦区画線間にはいずれも集合条線による文様が描出され、堀之内Ⅰ式では後葉段階に属する。縦区画線の変化形態の一例といえよう。

そこで、縦区画線の基本形はどのようなタイプがあるか考えてみよう。

称名寺式終末から堀之内Ⅰ式にかけて著名な例に、港北ニュータウン三の丸遺跡（註48）B J 65住居例がある。器形は胴部から口縁にかけて外反し、文様帯下端区画線付近で鋭く屈曲して底部に至る。三の丸遺跡例の縦区画線は沈線であるが、一般的に第8図10の鴻ノ巣貝塚例のように、連鎖状隆帯となる。系譜上は東北南部にあり、小梁川東遺跡（註49）、二屋敷遺跡に類例がある。東北でいう方形区画文土器の一種で、大木10式終末段階からの系譜が考えられる。関東での出土例はまだ多くない。他の綱取式タイプの土器に比べて変形の度合は少ないかもしれない。

さて、この方形区画の手法は、やがて各タイプの土器に取り入れられる。第9図8の六反田遺跡例は朝顔形の器形に取り入れられた例である。連鎖状隆帯の縦区画線と蕨手文を組み合わせた懸垂文で、文様帯の構成も朝顔形土器に取り入れられている。9の大貫落神遺跡例はその変化形態ともいえよう。下端区画線の採用はこの種のタイプが一つの役割を果たしていると考えられる。

堀之内Ⅰ式の下端区画線例にはもう一つ異なったタイプがある。船原内郷通遺跡3の例のような文様帯下端に表現された波頭状モチーフの沈線である。関東での出土量は少ないが、第10図1の陸平遺跡の朝顔形深鉢（註50）は典型例である。波頂部下の胴部文様帯には対称対弧文風のモチーフがあり、東北南部にも広くみられ、波頭状沈線の下端区画線とともに東北の系譜上にある要素である。

2の権現原遺跡例は陸平遺跡例より古い段階であるが、同タイプの単位文を持ち、下端区画線も単位文下に波頭状文がある。このように波頭状文は長い時期にわたって存続したモチーフであることがわかる。

ところで、関東称名寺式初頭の文様帯は、下端区画線で仕切られることが大きな特徴の一つとなっている。弧状をつなげた波状沈線のみであったり、単位文の下に渦巻文のモチーフの付加された例も多い。しかし、成立期以降は下端開放型となり、終末段階では単区画線の施された例がほとんどみられない。これに対して福島県では、完全に称名寺式といえない土器であるが、曲線的な磨消縄文を持つ土器に波頭状モチーフの例がある。

下端区画線の引かれる土器は、関東の称名寺式初頭の一時期に盛行するが、前後の時期ではほとんどみられない施文手法である。このようにみえてくると、称名寺式初頭のモチーフは関東の系譜上になく、その成立を類似したモチーフをとる西日本の中津式に求めることが一般的である。一方、東北の大木9式では胴部文様帯の下端は開放型の懸垂文であり、10式になると上下二段の文様帯、下端の区画された文様帯が出現している。文様帯区画のあり方は称名寺式古段階と大木10式が同一である。第10図4、6、7～10（註51）は大木10式土器であるが、7を除くと、いずれもいわゆるアルファベット文が施される土器で、10式でも前半段階に位置する。これらの下端区画線は4、5のよ

うな大きな波頭状文例のほか、8、9のような弧状線の連続したものもある。船原内郷通遺跡3の下端区画線の起源はこの当りに求められるのではなからうか。なお、大木10式の中に波頭状文が著しく発達した例もある。概して古段階の土器である。これに対して11は、口縁部無文帯にI字文の付く綱取I式の例である。I式としてもそれほど古い段階のものではない。時間的な隔たりが大きいことから、偶然類似したモチーフになったとも考えられるが、今後検討してみたい。

次に、3の文様帯の展開を検討しよう。文様は先の下端区画線と頸部区画線との間の縄文地に沈線で囲まれた無文の渦巻文と渦巻文をつなぐ斜行線が置かれたものである。このタイプの胴部文様帯の土器が多量に出土した二屋敷遺跡の例から3を挙げた。モチーフは相似といえないが、無文のJ字文、渦巻文と斜行線が一体となったモチーフなど、文様描出の原則はほぼ同一といっていよう。船原内郷通遺跡例の縄文施文は充填縄文であった。手法的には新しい要素と考えられ、系譜は、明らかに東北南部の土器に由来しよう。

ところで、後期初頭の代表的な単位文としてJ字文がある。称名寺式段階でも縄文地に無文の2段構成の土器が長い時間にわたって展開している。第9図6は東北で採用されたJ字文の例である。盲孔を持つボタン状貼付文が付けられていないことから、綱取式成立前段階の可能性もあろう。これに対し、12は愛谷遺跡例で、シンポジウム資料の写真図版から起こしたものである。7の大木10式後半段階の土器と類似したモチーフをとる。無文帯のJ字文の先端が上端区画線で合流して楕円状のモチーフとなるが、斜行ぎみの無文帯でつながっている。口縁部無文帯の逆C字貼付文、上端区画線の合流点でのボタン状貼付文の存在などから、時期は大木10式に後続すると同時に、モチーフの類似から考えて、7とそれほど時間的隔たりはないと考えられよう。いずれにしても斜行線の起源はこのあたりの土器が考えられよう。

この縦区画線単位文とその間をつなぐ斜行線のモチーフの組み合わせは、堀之内I式土器の基本の文様構成である。独立した単位文間をつなぐという意識の出現と同時にこの斜行線が様々な変貌をとげ、堀之内式で採用される各種のモチーフへと展開している。

盲孔を持つボタン状貼付文は、船原内郷通遺跡の3個体の土器でも多少はあるが、いずれも貼り付けられており、堀之内式でも象徴的存在の一つである。表現形態も単独の単位文だけでなく、盲孔をつなぐ沈線、貼付文状に施された盲孔をつなぐ沈線例と多様である。8字隆帯貼付文もこの変形といえる。第10図12は最も初期の例であろう。関東では称名寺式中頃段階の坂東山遺跡(註52)例の幅広い無文の口縁部にある対向C字貼付文隆帯に引かれた盲孔をつなぐ沈線例が最古例の一つと考えられる。

このように、盲孔をつなぐ沈線という点に限れば、称名寺式後半の早い時期に完成した姿で登場していることになる。

坂東山遺跡例の年代的位置は、今村氏のIc式に当たる。称名寺式の成立からどの程度隔たりがあるかは、今後の検討課題である。C字貼付文や盲孔の間をつなぐ沈線文の存在などの口縁部文様帯の特徴は、本来の称名寺式にはみられない要素である。これらの要素は口縁部に幅広い無文帯を置く点から中期終末の一部の土器に存在するが、綱取式を決定付ける主要な要素でもある。これらの諸点を綱取式の観点からみれば、その成立期は、坂東山遺跡例段階以降とすることができる。

ところで、ボタン状貼付文に限定して系譜をたどると、その起源に大木10式の連結S字文の下端の一部に粘土紐の跳ね上がってC字状の粘土紐貼付文の付加される例の挙げられる場合がある。貼付文はモチーフの変換点に施文される。三十稲葉式を検討した田中耕作氏もこの点を指摘している。第10図8から10は大木10式のアルファベット文が施文され、胴部下半に弧状下端区画線のめぐる土器である。弧状線の交点、アルファベット文の変換点に貼付文の付けられた例で、いずれも新潟県の遺跡から出土した土器である。器面に展開するモチーフは大木式そのものに近いが、地文はすべて撚糸文であった。

10例は小さな弧状貼付文が付けられる。施文位置はボタン状貼付文と同じであり、代置されうる位置、モチーフと考えられる。弧状貼付文は、東北の大木10式後半の土器に描かれる磨消縄文モチーフの要所要所に配されている。地文が撚糸文といった異なる点はあるが、大木10式としてのモチーフは前半期に属し、これらの地域では先行して存在する。

いずれにしても、堀之内I式に盛行するボタン状貼付文は、大木10式の貼付文と直接関連を示唆する材料はないが、堀之内I式の段階で地域や時間を超えて長く使用され、多様な変形をとげながら使用されたことになる。

Ⅶ おわりに

堀之内式土器の研究は、1975年の柿沼修平氏による文様要素の分類（註53）、1978年の斉藤弘道氏による研究史の整理と分析（註54）をへて、1982年、市川市立考古博物館で実施されたシンポジウム「堀之内式土器」によって系譜と編年が本格的に検討され、堀之内式の成立に東南北部の綱取式が大きく関与していることが多くの論者により主張され、I式の編年も最低三細分が提唱されて、その後一般化した。また、これを契機に石井寛氏や小川和博氏の堀之内II式の論文（註55）が生まれ、細分されるようになるなど、成果は多く、意義の深いシンポジウムであった。

その後、堀之内I式の編年は報告書などで検討されることがあったが、正面から取り上げた論文は少なかった。最近になって提出された阿部氏の一連の論文が知られる程度である。

これまで述べてきたように、現在でも各段階の堀之内I式の内容は、住居跡一括例が揃っていないこともあり、各氏の内容が異なっている。本遺跡例は明らかに東関東的土器で、器面に展開するモチーフの展開の仕方から各氏の編年に照らしても中頃の所産であることは間違いない。

しかし、朝顔形という称名寺式段階にはない器形は関東の例に限定すれば、口縁部に盲孔をつなぐ沈線が地域を問わず当初から存在し、他のタイプとは異なった特徴を持っていないことなど、残された課題は多い。筆者に堀之内I式土器の組成の体系と編年を十分理解していたため、今回紹介した土器の正確な位置付けを検討するまでに至らなかった。

そのため、小稿では船原内郷通遺跡で出土した埼玉北東部の土器群の特徴や称名寺式終末から堀之内式にかけて変遷の様子を概観し、東関東での変遷のあり方と比較してみた。船原内郷通遺跡例から考えられる諸要素、特に、朝顔形の器形、口縁部文様帯や胴部文様帯、下端の区画線を中心に取り上げた。ボタン状貼付文なども成立過程を中心に若干検討した。

また、周辺遺跡として中三谷遺跡、赤城遺跡を取り上げ、称名寺式段階から堀之内I式成立期に

かけてのこの地域での土器の組成内容を中心に検討した。今回紹介した土器の場合、いずれも東関東的な土器であったことから、西関東的色彩の強いことは意外であった。

称名寺式終末段階の地域的特徴を比較するため、東関東のこの段階の例としてやや内陸に入った酒々井町鴻ノ巣遺跡と東京湾岸の袖ヶ浦町伊丹山遺跡例を比較したが、網取式の関係で、土器の組成に違いがみられた。堀之内Ⅰ式成立期の東関東でも細かな差異があり、各氏の成立期の土器の内容が異なる原因の一つでとなっている。

文様帯や文様の各要素は、すでに各氏が指摘しているとおり、網取式、ひいては大木10式からの系譜を引くことの明かな部分が多い。しかし、先に検討したように、器形、文様帯、文様要素など共通する要素を持ちながら、一つの土器となった場合、関東と東北南部では異なった表情をみせる。関東の場合に限っても地域による変差がある。この現象の大きな原因に前段階の土器が備えている地域ごとの文様帯の特性に関わっていると考えられよう。

今回、これらいくつかの要素を検討するに当たって、各要素相互の関係を知るには正確な編年の関係の把握が欠かせない。しかし、遺構でのまとまった出土例が少ないこと、称名寺式終末から堀之内Ⅰ式の成立までは東北南部との複雑な交流関係、独自の変形などの要素が多い。これらを解きほぐすにはさらに一層の研究の進展が必要であろう。堀之内Ⅰ式成立に大きな影響を与えた網取式の場合も、馬目氏による細分案が提出されているが、関東中期終末からの編年と東北の編年がかみあっておらず、編年の齟齬がこの時期の両地域の関係を知る上で大きな障害となっている。

筆者がこの間の編年を考える材料として、福島県平石遺跡（註56）などにおいて、大木10式と加曾利EⅣ式が平行関係にあることが明らかになったこと、一方、関東では加曾利EⅣ式は後続する称名寺式との関係から細分はそれほどできないのではないかと、といった点などを基軸に考えている。

一方、網取式の成立は、馬目氏が愛谷遺跡の例で大木10式のモチーフを持つ土器に盲孔を持つボタン状貼付文の加わる初頭期の土器を指摘した。しかし、そこには、大木10式や関東のどの段階、どのような称名寺式と平行関係にあるかを明らかにできる材料はない。称名寺式の側から網取式の影響が顕在化する段階は坂東山遺跡例に示すように、Ⅰb式段階であろう。これらの諸点を総合して関東の土器群から東北との平行関係をみると、加曾利EⅣ式が大木9新式、称名寺式Ⅰb式が網取式の影響を受ける段階とすることができる。このことから称名寺式成立期以降、Ⅰb式の間までが大木10式に当たることになる。ところで、大木10式の従来の編年は、3細分、ないしは4細分されることが普通であるが、従来の称名寺式の編年では十分な対応される土器が挙げられていない。大木10式の観点から称名寺式を対比すれば、その細分が進められることとなろう。

このように考えると、大木10式と称名寺式との関係から称名寺式の成立期から網取式の影響がみられるまでの称名寺式の変遷過程が大きな問題として残るであろう。堀之内Ⅰ式の諸要素を多く持つ網取式がどの段階で成立し、どのような文様帯、文様要素の土器群で構成されるかは称名寺式と大木10式、網取式との関係をはっきりさせる必要があり、いずれ機会をみて検討し、堀之内Ⅰ式の成立、変遷を考えてみたい。

- 註1 高木豊三郎他 1936 「史蹟埼玉」
- 註2 山口平八 1963 「行田市史」上巻
- 註3 新屋雅明他 1988 「赤城遺跡」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第74集
- 註4 細田勝也 1987 「中三谷遺跡」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第76集
- 註5 埼玉県教育委員会 1982 「地獄田遺跡」埼玉県埋蔵文化財調査年報昭和55年度
- 註6 橋本勉他 1984 「久台」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第36集
- 註7 鈴木敏昭他 1983 「ささら・帆立・馬込新屋敷・馬込大原」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第24集
- 註8 宮崎朝雄他 1976 「岩槻市黒谷田端前遺跡」黒谷田端前遺跡調査会
- 註9 並木隆 1978 「裏慈恩寺遺跡」埼玉県遺跡調査会報告書第33集
- 註10 青木秀雄他 1983 「前原遺跡」宮代町文化財調査報告書第1集
- 註11 山内清男 1939 「日本先史土器図譜」第VI輯堀之内式
- 註12 柳沢清一 1977~
79 「称名寺式土器論」上、中、下、結論 古代63、65、66、68号
- 註13 市川市立博物館 1982 「シンポジウム 堀之内式土器」資料及び記録
- 註14 安孫子昭二 1981 「縄文後期の土器」縄文土器大成3後期
- 註15 安孫子昭二他 1972 「平尾遺跡調査報告I」南多摩郡平尾遺跡調査会
- 註16 戸沢充則他 1971 「市川市史」第1巻
- 註17 清水潤三 1958 「千葉県栗山川溪谷における貝塚の地域的研究」史学第31巻1号
- 註18 石井寛 1984 「堀之内2式土器の研究」調査研究収録第5冊 港北ニュータウン埋蔵文化財調査団
- 註19 阿部芳郎 1987 「縄文後期前葉型式群の構造と動態」駿台史学第71号
阿部芳郎 1988 「堀之内1式の土器の構成と変遷」信濃第40巻第4号
- 註20 石坂茂 1980 「荒砥二之堰遺跡」群馬県文化財調査事業団
- 註21 沼沢豊 1974 「松戸市金桶台遺跡」千葉県都市公社
- 註22 稲村晃嗣 1988 「鴻ノ巣貝塚出土の縄文後期初頭の土器群（補遺）」村上徹君追悼論文集
- 註23 三森俊彦 1979 「袖ヶ浦町伊丹山遺跡」伊丹山遺跡発掘調査団
- 註24 吉田格 1960 「横浜市称名寺貝塚」東京都武蔵野郷土博物館調査報告第1冊
- 註25 金子浩昌他 1958 「鉦切洞穴遺跡」千葉県教育委員会
- 註26 関根孝夫 1973 「貝の花貝塚」松戸市文化財調査報告第4集
- 註27 市川修 1983 「塚屋・北塚屋」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第25集
- 註28 青木秀雄他 1983 「皿沼遺跡発掘調査報告書」白岡町文化財調査報告書第1集
- 註29 加藤道男 1984 「二屋敷遺跡」宮城県文化財調査報告書第99集
- 註30 金子浩昌ほか 1968 「綱取C地点貝塚の発掘」小名浜
馬目順一 1968 「綱取第四地点発見の堀之内I式土器の考察」小名浜

- 馬目順一 1977 「いわゆる『網取貝塚C地区』の土器について」考古第19集
- 註31 馬目順一他 1975 「大畑貝塚調査報告」いわき市教育委員会
- 註32 沼沢文夫 1986 「小場遺跡」茨城県教育財団文化財調査報告書第35集
- 註33 上川名昭 1972 「大洗吹上遺跡」
- 註34 橋本勉他 1980 「沼尾原遺跡」鹿島町の文化財第11集
- 註35 齊藤弘道 1984 「南三島遺跡1・2区」茨城県教育財団文化財調査報告書第27集
- 中根節男 1986 「南三島遺跡5区」茨城県教育財団文化財調査報告書第32集
- 齊藤弘道 1987 「南三島遺跡3・4区」茨城県教育財団文化財調査報告書第44集
- 註36 瓦吹堅他 1982 「廻り地A遺跡」茨城県教育財団文化財調査報告書第15集
- 註37 中山吉秀 1981 「千葉県流山市江戸川台第I遺跡」江戸川台第I遺跡調査会
- 註38 宮城孝之 1986 「酒々井町伊篠白幡遺跡」千葉県文化センター
- 註39 郷田良一他 1979 「木戸作遺跡(第2次)」千葉県ニュータウン7
- 註40 郷田良一他 1982 「小金沢貝塚」千葉県東南部ニュータウン10
- 註41 早川智明他 1970 「櫛谷遺跡発掘調査報告」埼玉考古第8号
- 註42 青木義脩他 1977 「前窪遺跡発掘調査報告書」浦和市遺跡調査会
- 註43 後藤勝彦 1974 「縄文後期宮戸I b式の周辺」東北の考古歴史論集
- 註44 佐藤洋他 1987 「六反田遺跡Ⅲ」仙台市文化財調査報告書102
- 註45 藤本弥城他 1980 「大貫落神貝塚」那珂川下流の石器時代研究Ⅱ
- 註46 富田裕他 1977 「長孫貝塚の調査」考古第19号
- 註47 註13に同じ
- 註48 真山悟他 1985 「小梁川東遺跡」宮城県文化財調査報告107
- 註49 注13に同じ
- 註50 4は、芳賀英一 1982 「日向遺跡」真野ダム関連遺跡発掘調査報告Ⅲ 飯館村教育委員会
5は、鈴木良一 1984 「上の台A遺跡」真野ダム関連遺跡発掘調査報告Ⅴ 福島県文化財調査報告書
7は、渡辺忠彦 1984 「下の内遺跡」仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報Ⅲ 8、9、
10は、田中耕作 1985 「所謂三十稲葉式の成立について」信濃第37巻第4号 11は、中村良幸
1979 「立石遺跡」大迫町埋蔵文化財調査報告3 による
- 註51 谷井彪他 1973 「坂東山遺跡」埼玉県遺跡発掘調査報告書第2集
- 註52 柿沼修平 1975 「堀之内式土器論」(1) (2)史館第5・6号
- 註53 齊藤弘道 1978 「堀之内式土器研究のあゆみ」茨城県歴史館報5
- 註54 小川和博 1984 「堀之内2式土器編年の課題—南関東を中心にして—」奈和15周年記念論集
- 小川和博 1985 「堀之内2式土器の成立をめぐって」古代第80号
- 註55 高島好一他 1989 「下平石遺跡」いわき市埋蔵文化財調査報告第22冊

